



当院における在宅患者の看取り 状況の分析と考察

医療法人社団プラタナス
桜新町アーバンクリニック
樋口 久仁子

日本在宅医療連合学会 COI開示

樋口 久仁子

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある
企業などはありません。

- 所在地: 東京都世田谷区
- 機能強化型在宅療養支援診療所
- 患者数: 年間約450名
- 看取り数: 年間約150件
- 多職種スタッフ: 医師13、看護師30、薬剤師2、リハビリ4、
SW2、ケアマネジャー2、介護職員13、ドライバー8、
医療事務8、総務10)



今回の背景と目的

- 終末期を自宅で療養したいと希望する国民は全体の6割にのぼるとも言われており、在宅医療の普及によって患者の希望に添った場所での看取りが推進されている。
- 当院では、年間看取り患者数は約150名となっており、がんの終末期や医療依存度の高い患者も疾患問わず幅広く診療を行っている。
- 今回、2018年～2022年の5年間で転帰が「死亡」の患者890名を分析対象とし、療養期間・死亡場所を中心に分析したので報告する。

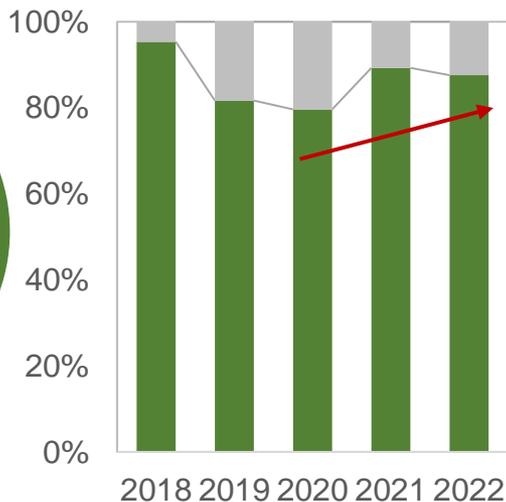
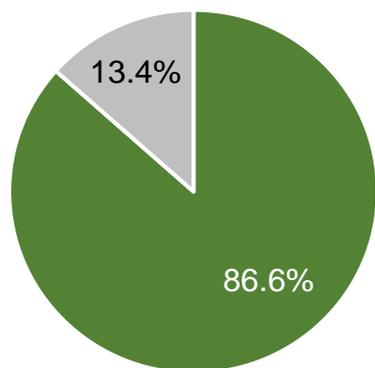
	がん	非がん
死亡患者数	454名	437名
平均年齢 (問い合わせ時)	75.3歳	86.3歳
平均年齢 (死亡時)	75.8歳	88.6歳
男女比	1:0.9 (241名:213名)	1:1.4 (179名:258名)

死亡場所割合(2018年～2022年)

- 死亡場所は、がん患者・非がん患者ともに、「自宅・施設」が80%を超えていた。
- 経年推移では、2019年・2020年で一時的に「病院」の割合が増加したものの、再び「自宅・施設」の割合が増加傾向にある。

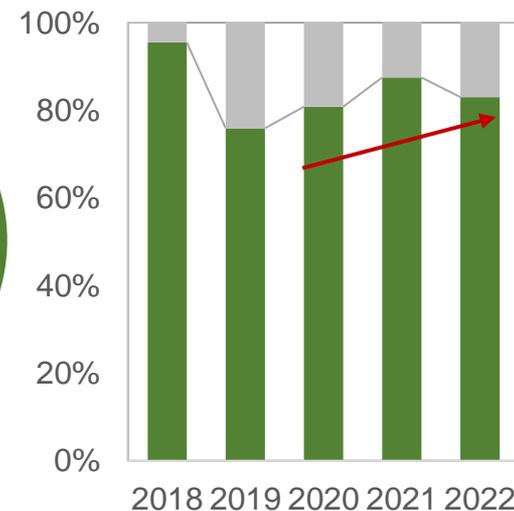
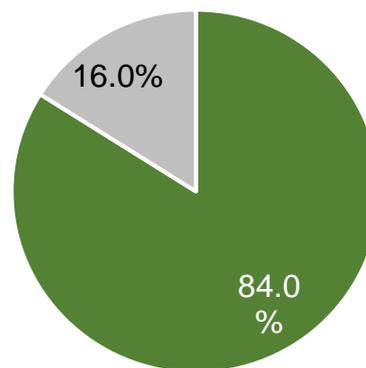
がん患者

■ 自宅・施設 ■ 病院



非がん患者

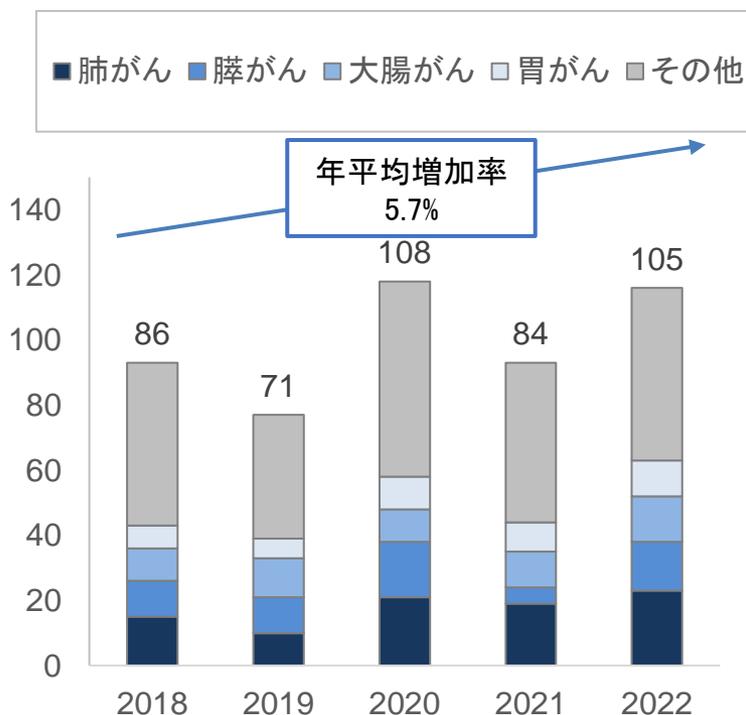
■ 自宅・施設 ■ 病院



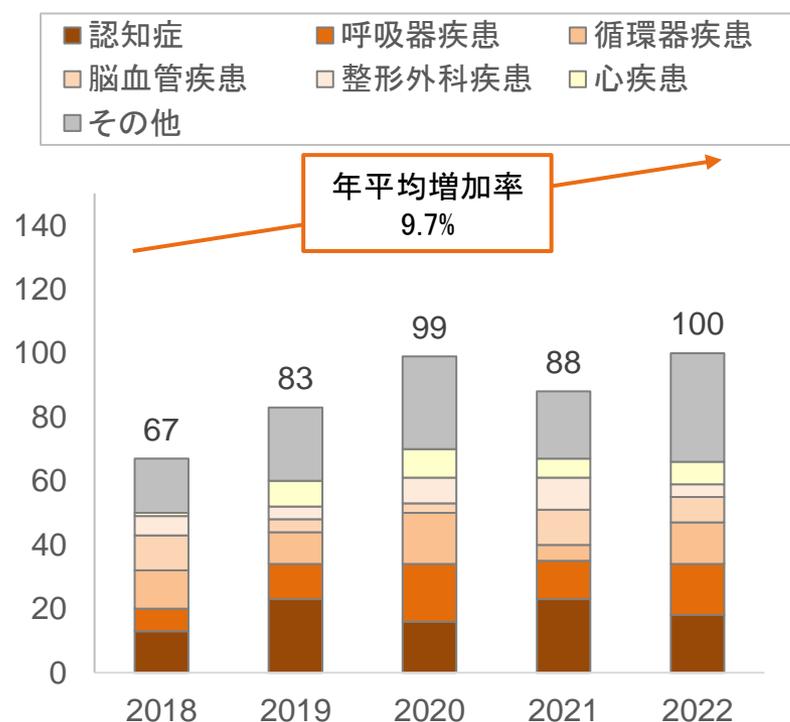
主病名別_経年推移(2018年~2022年)

- がん患者、非がん患者ともに増加していた。
- 特に非がん患者のうち、呼吸器疾患や循環器疾患が増加していた。

がん患者



非がん患者

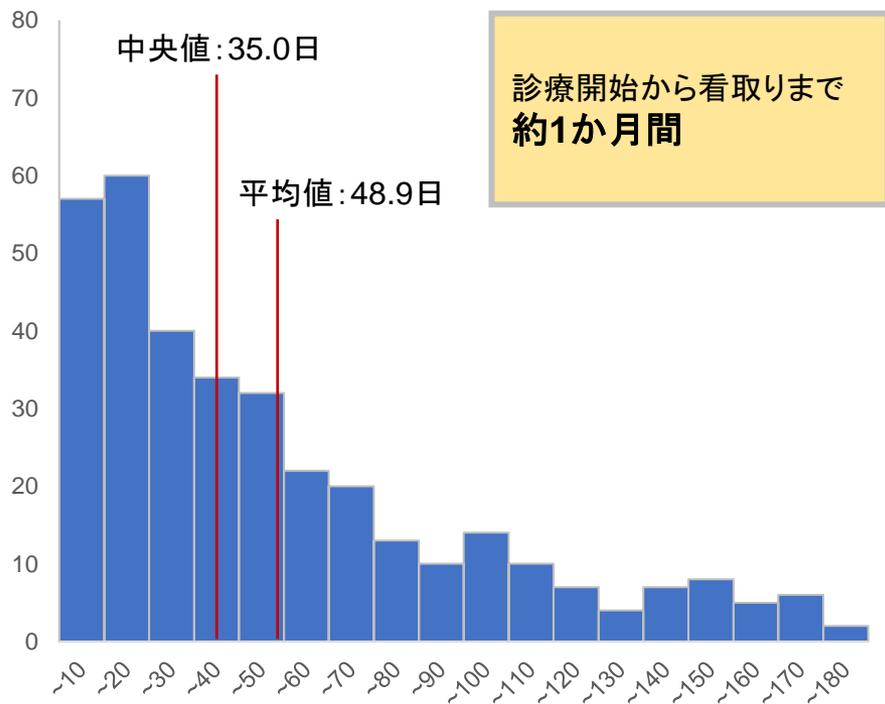


※年平均増加率... $(2023\text{年度の人数}/2018\text{年度の人数})^{1/(2023\text{年}-2018\text{年})}-1$ で算出した過去数年の成長率から1年あたりの平均を割り出したもの

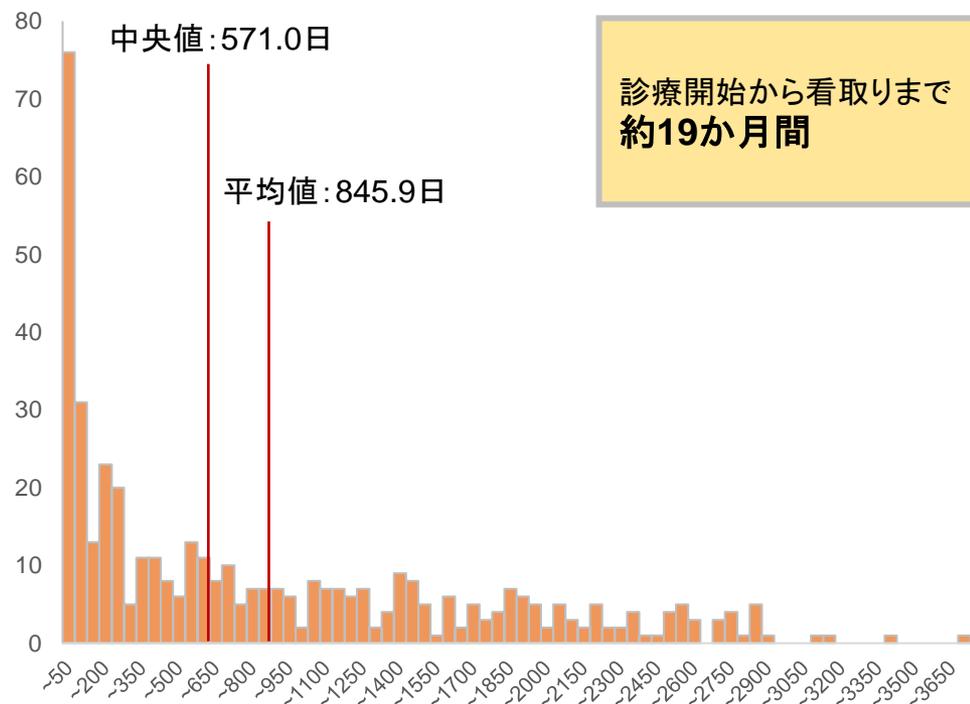
療養期間(2018年～2022年)

- がん患者(※)は療養期間が約1か月間(中央値)と、非がん患者に比べて短かった。
- 非がん患者は療養期間が長く、数年にわたり療養している場合が多かった。

がん患者



非がん患者



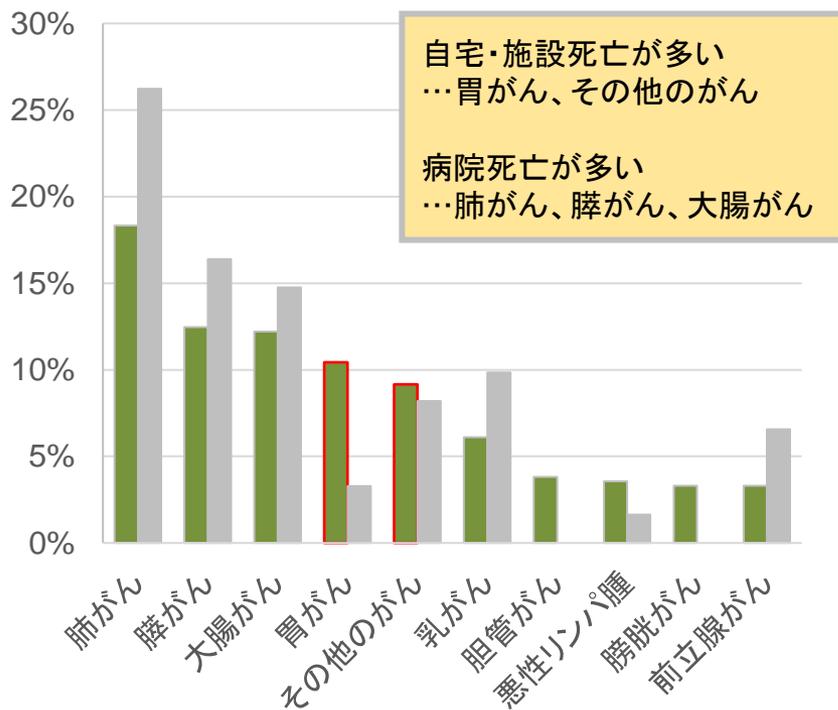
※がん患者…療養期間が6か月以上の場合を除く

主病名別・死亡場所別割合(2018年～2022年)

- がん患者では、「自宅・施設」が病院を上回っていたのは胃がん、次いでその他のがんだった。
- 非がん患者では、「自宅・施設」が病院を上回っていたのは認知症、次いで呼吸器疾患だった。

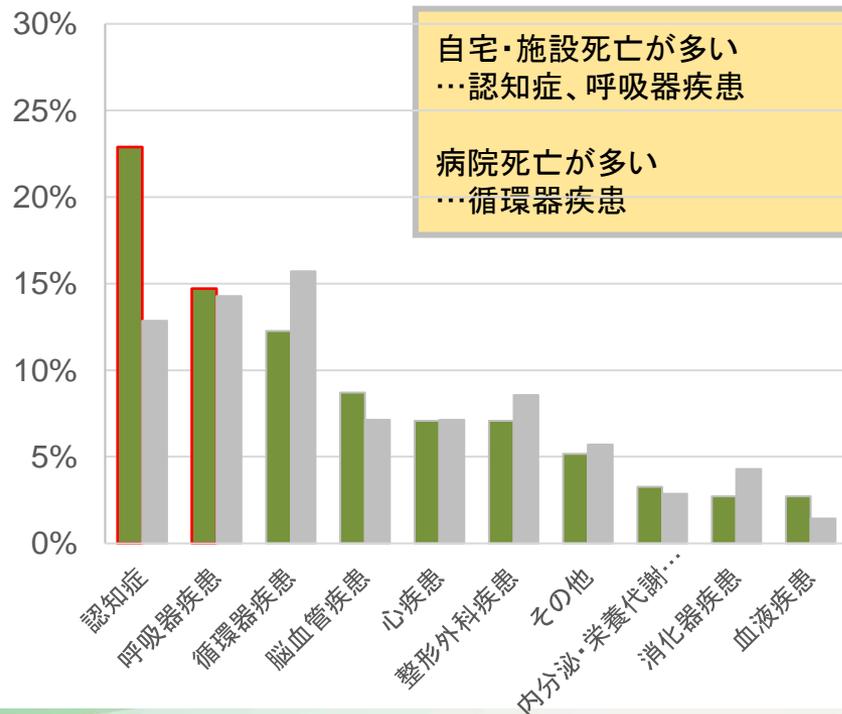
がん患者

■ 自宅・施設 ■ 病院



非がん患者

■ 自宅・施設 ■ 病院



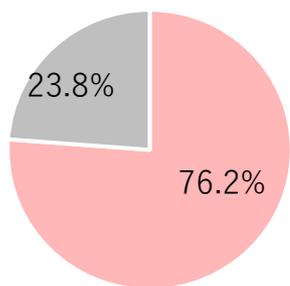
訪問看護・在宅酸素の利用(2022年)

- 訪問看護、在宅酸素ともにがん患者の方が利用割合が高かった。

訪問看護の有無

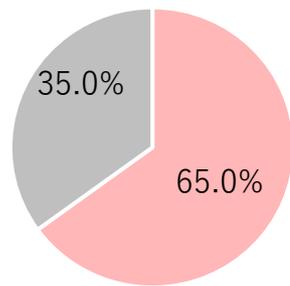
がん

■ 利用あり ■ 利用なし



非がん

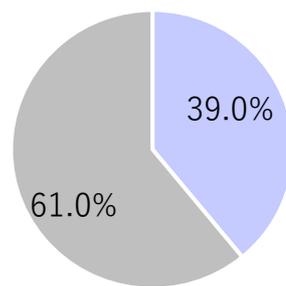
■ 利用あり ■ 利用なし



在宅酸素の有無

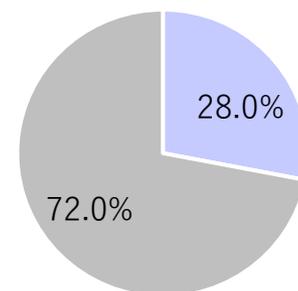
がん

■ 利用あり ■ 利用なし



非がん

■ 利用あり ■ 利用なし



- がん・非がん患者ともに、死亡場所「自宅・施設」の割合が8割を超えていた。
- がん患者では療養期間が約1か月間(中央値)と短期間だった。
- がん患者では訪問看護等のサービスや、在宅酸素といった様々な処置が必要となる。

今後さらに、自宅での療養希望に添った医療・介護を提供していくためには、適切な予測と早期の事業所間・多職種連携が重要である。

特にがん患者では、在宅療養期間が短く、多職種とのスムーズな連携やサービスの介入の早さなどが今後より一層求められると考えられる。